月刊

こころのとも

第五巻
二月号

優しさと厳しさ

優しさのない
厳しさは
真の厳しさではない

自己の意地を
通しているだけ

厳しさのない
優しさは
真の優しさではない

自己の情に
流されているだけ

こころのまど

からだは
こころのまど
まどを飾れば
こころも磨け

自然の運行

自然行
人は見ずとも
花は咲き
誰が聞かずも
鳥は鳴きけり

人生を考え直して みたい人は（二）

―老子解説（一）―

先月号で予告いたしました通り、今月号から当分、私が四聖の一人とします老子を取り上げて解説したいと思います。皆さんが日頃生きていく上の哲学、つまり考え方を考え直す参考になればと思います。

まず、『老子』という本を書いた人物ですがはっきり分かっていません。「ろうたん」だという説が有力ですが、ここでは、老子という人物が『老子』という本を書いたことにしておきます。また、この本を書いた年代も、はっきりしていません。孔子よりも先だという説もありますし、後だという説もあります。ここでは孔子後約百年の、紀元前四百年前後ということにしておきます。いずれにしましても、ここでは大した問題ではありません。

ただ、第三巻七月号の随筆に「老子」を載せましたが、その中で述べましたように『老子』書の中には、老子本人が書いたもの以外に、後の弟子や賛同者たちによって書き加えられた部分がかなりあるように思えます。実は、その随筆を載せました後で、老子の研究ではこの人を避けては通れないという、立派な業績を上げた武内義雄博士の「老子原始」と「老子の研究」を読みまして、私がおかしいと思ったところは後世の人が書き加えたものであることを知りました。私は内容的にそう思ったのですが、武内博士は、文献的、文章的にそう考えられると指摘しています。ですから、『こころのとも』では、『老子』書の言葉そのものにはあまり執らわれないで、文意をくんだ現代語の意訳で、しかも勝手にカットしたりして、紹介したいと思います。そして、それに私の理解する解説を、かなり自由に加えたいと思います。興味が出て原典を見たい人は、幾らでも解説書が出ていますから、それにあたって下さい。なお『老子』書は八十一の短い章（全部で五千語）から成っていますが、全部を解説する必要もないと思います。と言いますのは八十一章の中には何度も同じことが繰り返し述べられていまのので、その時のテーマに沿って、まとめて幾つかの章を取り上げればいいと思うからです。

さて、老子を一言でいえば、「道（タオ）」を説いた人と言えます。では、道とは何か。先ず、第一章を見てみたいと思います。

（第一章）私が、道と呼ぼうとする「道」は、普通の道ではありません。また、こうした「名（概念）」は、同様に普通の名ではありません。「無」は天地の始めに付ける名、「有」は万物の母につける名です。ですから、つねに無は存在の裏にある自らの奥深い元の意味を取り戻そうとしますし、有は現象の世界を現象の世界たらしめようとします。この有と無は、違ったように見えますが、同じものに異なった名を与えているだけです。どちらも奥深く測り知れないもの（道）を表しています。

さてここで出てきたキーワードは、道、名、無、有、の四つです。

まず、道ですが、それは勿論、ふつうの道路ではありません。あるいは、人のふみ行うべき道でもないのです。それは、さらにもっと抽象的なものなのです。私たちが毎日使っている言葉は概念と呼ばれますが、その概念を超えたものが、ここでいう道なのです。もっと分かりやすく言いますと、それは、私たちの「あたま」で捉えられないもの、私たちの認識（認知―言語、知識）を超えたものなのです。

少し余談ですが、「あたま」で捉えられないような、やっかいなものを、なぜ考えなければならないのか。そんなものを考えなくても、自分は十分幸せだと思っている人がいると

したら、そういう人こそ考えなければならない問題なのです。

だって、そういう人もきっと死が訪れて来ますし、病気にもなりますし、自分の思うようにならない不幸せが訪れて来るかも知れないからです。そうした時、不幸せだと思わなくてもよいように、前もって考えておかなければならないものなのです。

話を戻しますと、「あたま」で捉えられなければ、では、どこで捉えるのでしょうか。

その答えは後回しにして、それは、先ずは人が言うのを聞いて、体験は出来なくても、「あたま」で分かったような気になるものなのです。そして、それに感動して自分も分かろうと努力するものなのです。

『老子』で説かれているのも、そうしたことです。まず、「あたま」で理解して、自分もそう思えるようになろうと努力してもらうためのものなのです。

何しろ老子にすれば、あたまでは捉えられないが、実は、あたまと、からだと、こころを統合すれば、自分の

経験として捉えることが出来たものを、あたまだけで分かってもらおうとするわけですから、それは元々無理なことなのです。話が抽象的になっても仕方ないのです。

老子の言う「道」とは、こんなものです。それはこの世の存在を超えたもの、「超越」あるいは「宇宙根本の原理」なのです。神と呼んでも仏と呼んでも空と呼んでもよいような、何という「名」を与えようと、この世の存在を存在せしめている根元なのです。それを老子では道と呼ぼうと約束するわけです。ですから、その名（認知－言語的概念）は普通の名ではありません。普通の人の経験を超えた名なのです。ですから、それは完全な抽象であると言えます。信じたくない人は信じられませんし、信じられると思う人は信じられる、そういうものです。

次のキーワードの「有」も「無」もそうした概念です。実感できない人には、論理としてしか理解できないものなのです。ですから、そんなものは役に立たないと思えば、無益な長物ということになります。ただ、理屈を言ってみるだけのものになります。欧米の哲学の多くは、自分が実感をもてもしないのに、知的満足のためにだけ、理屈を並べ立てているように、私には思えますが。

さて、有と無の説明ですが、普通は何かが有る、何かが無くなった、というふうに主語を付けて使います。では、その主語の何かを取り去ってしまいますと、どうなるでしょうか。

そうしますと、それは、ただ有る、無い、ということになり、抽象的になってしまいます。具体物は消えて、有と無ということばだけが残るのです。実は、それは有ると思っても無いと思ってもどちらでもよいという世界です。

誰でもあまり好きではないと思いますが、幾何学には点という概念があります。その点は、重さも大きさももちませんが、位置だけをもっています。もし、その点から位置をとってしまったら、何が残るでしょうか。位置しか無いのに、その位置をとるわけですから、そこにはもう何も残りません。つまり、点が有ると言っても、無いと言っても、どちらでもよいということになってしまいます。つまり、無規定になったとき、有と無はどちらでもよい、等しいものになるのです。

この世に存在するものを存在せしめるもの、それを道と呼びましたが、それを個別の存在という観点から考えますと、存在すること（有）と存在が消滅すること（無）が問題になるというわけです。特に、私たち人間では、それは生まれることと死ぬことを意味しますから、大問

題です。人間は誰でも、死にたくないのに死ななければならないからです。

ですから、この問題を考えることは道元も言いましたように、生死の問題を明らかにする、仏家一生の大仕事なのです。否、仏家だけではなく、心に不動の幸せを確立しようとする人には誰にでも、不可欠なことと言えるのです。

存在するもの（有）はその存在の消滅（無）の可能性（契機）を含んで、必然的に運動します。否定と肯定の矛盾のはざまを生きて行きます。生きながら死んで行くのです。

こう考える論理を弁証法と呼んでいますが、老子はまさしく弁証法を駆使しているのです。弁証法では、有と無といったような、対立するものをいつも設定します。そして常に常識を超え、逆説的に言いながら、ことの本質を明らかにしていくのです。これまで読んで頂いた解説を頭に置いてもう一度、老子の現代意訳を読み返して頂きたいと思います。

無は天地の始め。有は万物の母。ここにはこの世のものは、まだ何ものも生み出されていません。しかし、やがて論理的に、そこから有と無、生と死の矛盾を含んだ全ての現象（物―生命―精神）が起こって来るのです。

自作詩短歌等選

善には染まりにくい

人間は善には
染まらず
悪に
染まりやすい

あたかも
腐ったみかんがあると
他のみかんが
どんどん腐るように

勝手な人間

人間は
雨が降っても
腹を立て
風が吹いても
腹を立てる

二分石とくり石

石積みは
二分石だけでは
成り立たぬ
多くのくり石
蔭で支える

争いをやめよう

人は

宗教の違いに
民族の違いに
国家の違いに
主義の違いに

こだわって
争いをする

宇宙は一つ
地球は一つ
人類は一つ

みんなで
心を一つにしよう

そして
争いをやめよう

そうしないと
人類は
きっと
滅亡するから

はえの因果

はえでさえ
因果なものよ
ぶんぶんと
たからなければ
打たれもせぬに

いのちの輝き

いのちは
輝いている
全てのいのちが
輝いている

物の
いのちも
生き物の
いのちも
人の
いのちも
みんな
みんな
輝いている

その輝きの
何と素晴らしきことよ
でも
それがわかるのは
人間だけ
だから
全ての輝きを
失わせないよう
私たち人間で
守っていこう

犬猫人生が笑う

犬猫人生を
生きる人が
犬猫以上の人生を
生きる人を笑い
犬猫人生を
生きる人を笑い
犬猫以下の人生を
生きる人を笑う

学者と覚者

学者とは
狭い知識を
持つだけで
何でも知ったと
思う人
何でも知れると
うぬぼれる人

覚者とは
自己の知識の限界を
いつでも自覚
出来る人
おごらず無知を
認める人

だけど一つを
知った人
神や仏に
贈られて
ただ生かされて
生きていることを

太りすぎの相撲取り

相撲取りも
太りすぎは
よくないらしい

ファッションモデルの
痩せ過ぎが
よくないように

自作随筆選

妊娠は如来蔵

ある、アルコール依存症の女性の人は妊娠すると、アルコールを全く飲まなくても安定していられるようになるそうなのです。胎児が可愛くて可愛くて仕方なく、人生でこんなに幸せな時はないと言います。

私はこの話を聞いて、如来蔵のことを思い出しました。彼女にとっては、正しく仏さまを宿したことになっているのです。

この人は「他己」はあるのですが、「自己」が充分発達していなくて、何事にもけじめがつけられません。反省してもすぐ、くじけてしまいます。

ところが、妊娠すると全てのことが胎児のためになるように行動するのです。自分の行動をそちらに向けてコントロールすることが出来るようになるのです。それは、多分、「自己」と「他己」が自分自身の中で統合されるようになるからだと思うのです。つまり、他者に拡散していた自己が自分自身の中のただ一人の他者に集中する

ことが出来るようになれるからです。　私たちも、心に宿した仏さまを磨き出すことによって、この事例と同じように自己と他己を自分の中で統合することができるようになります。そして、その結果として、行動も自由にコントロールできるようになるのです。

このように、人間はもともと心の中に仏さまを宿している、と考えることを、仏教では、如来蔵思想と言いますが、後に「一切衆生悉有仏性」と言われるようになりました。

孟子の仁義

孟子は、孔子に私淑し、のちに性善説を説きました。よく引用される言葉に次のようなものがあります。

仁とは人の心なり、義とは人の路なり。その路をすてて由（よ）らず、その心を放って求むることを知らざる、哀しいかな。

人間は、こういう仁と義の心をもっているのですが、そうした「生まれながらの善」の心が、欲望によって阻まれている。だから、その欲望を抑えることが大切であるとします。つまり、欲を寡（すく）なく抑えて、「仁」と「義」を行うべきことを説いているのです。では、「仁とは人の心、義とは人の路」と言いますが、具体的にはどんなことなのでしょうか。私なりの考えを、少し述べてみたいと思います。

まず仁ですが、それは孟子の師、孔子が説く通り、自分を抑えて人を立てることです。仏教で言えばお布施の心に当たり、キリスト教では隣人愛です。それは、無私の愛を他者に施すことだと思います。「させて頂いてありがたい」そいう心をもってなす行為です。

ですから、自分がなしたお布施を人にひろめたら、もうおしまいの行為です。神社仏閣に、よく、誰それが何をどれほど寄付したかが、人目に付くように石などに彫られていますが、あんなことをするとお布施どころか、既に、悪業を犯してしまっています。そんなことなら、お布施をしないほうがましなのです。

これが仁ですが、義はいま述べました、「そんなことならしないほうがましだ」という、その判断です。人のふみおこなうべき道です。私は、それを「法」という言葉で表しています。規範、道徳、秩序、伝統、法律、制度、などです。これらは、いずれも社会を維持するよう

に働きます。

私はあまり好みませんが、その中には、儒教の説く長幼の序とか、父母の恩とか、体制維持的な道徳も含まれます。人間は長く生きていれば年若く幼い人より尊いなどと、私は思いませんし、父母の恩についても、「育てさせて頂いてありがたい」という仁の気持ちがあれば、別に恩を売らなくても、自然に子は恩を感じるものだと思います。私は、本当は先ず、親の方が子に「させて頂いてありがたい」というお布施の気持を持つべきだ、と思うのです。そうすれば、子どもも自然に「して頂いてありがたい」という気持ちをもつようになると思うのです。親が育ててやったと恩を売れば、子も、誰が生んでくれ、育ててくれと頼んだのだ、と言いたくなります。親も料簡違いなら、子も自然に、料簡違いに育っていくのです。

少し話が余談になりましたが、仁と義はどちらも人間関係のあり方を説いた教えです。その人間関係ですが、それは、どこまでも相対的です。一方が、絶対的存在に心から帰依しない限り相対的です。いま右で、親と子の心理的な相互関係について少し述べましたが、これはどんな関係についても言えることです。お互いが、「させて頂いてありがとう」「して頂いてありがとう」という気持ちを持ち合えば、あらゆる関係は円満に行くのです。そうする心が仁であり、そうすべきであるとする考え方やそうできるようにする社会的システムが義だ、と私は思うのです。

釈尊のことば（二〇）

―法句経解説―

（七五）一つは利得に達する道であり、他の一つは安らぎにいたる道である。ブッダの弟子である修行僧はこのことわりを知って栄誉を喜ぶな。孤独の境地にはげめ。

先月号に「大賛成か大反対」という詩を載せました。私には、いま、多くの人が自分の損得だけで行動しているように思えて仕方ありません。自分が得をすることには、たとえ間違っている悪い行いであっても賛成しますし、逆に、自分が損をすると思えば、たとえ正しく善い行いであっても反対し、非難します。これは、善悪や真偽が最も問われなければならない大学でも同様です。勿

論、政治界や経済界や行政界では、当然のこととされています。そればかりか最近の汚職を見ていますと、うそをどれほど堂々と言えるかが、政治家や経済家の能力とされているようにさえ思えてきます。悲しいかな、僧侶の中にも、自分の利得のためにうそが平気で言える人もいます。こういう人は、どれほど利得を得、どれほど栄誉を得ても「安らぎにいたる」ことは決してありません。

人は、住むところがなく、食べるものさえなくても、安らかに満たされた境地にいることが出来ることを知らなければなりません。そしてそれこそが、どんなことによっても乱されない、たとえ自分の生命を失うことによっても乱されない安らぎなのです。

道元は、弟子の一人が幕府から領地をもらって、寺に喜び帰り、報告したのを聞いて、即刻その弟子を破門にし、その人が住んでいた部屋の下の土を六尺も堀って捨てさせ、土を入替えさせました。利得をもらい、栄誉に与かって、得々としている弟子の愚かさが、許せなかったのだと思います。偈にみますように、それは、解脱からますます遠ざかる道だからです。

出家した僧には、どこまでも安らぎにいたる修行がいります。孤独な修行がいります。誰に認められなくても、ただひたすら仏・法・僧の三宝を信じ、修行に励まなければなりません。親も子も兄弟もないのです。そこに執らわれたら、真の安らぎにはなかなか至れないからです。それが、まさしく出家なのです。世襲の多くの坊主もこの偈を読んで少しは反省してもらいたいものです。出家するどころか、寺を子々孫々の私有物にし、ドイツの高級外車を乗り回し、ゴルフや飲む打つ買うの遊びにほうけていては、ブッダがあの世で泣いておられます。

第六章　賢い人

（七六）（おのが）罪過（つみとが）を指し示し過ちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従え。隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことは無い。

先ほどの偈の解説で述べましたように、いま多くの人は自分の損得だけで行動しがちです。ということは、自分の善悪を反省することが少なくなって来ていることを意味しています。経済的豊かさのお陰で傲慢になり、精神的貧困を招いているように思えます。精神的品位をだんだんと無くしてきているように思えるのです。　たと

え間違いで、罪業を重ねている、と指摘されても、それを反省しないで、逆に外道の逆恨みをしますから、大抵の人は何も言わなくなって来ています。自分の得にならないからです。それも自分の損得だけで判断するのです。

アメリカでの有名な話ですが、一人の女の人が、夜、アパートの近くの駐車場で男に襲われました。悲鳴をあげましたが、誰も助けに来てくれません。そうしているうちに、遂に男に刺し殺されてしまいました。実は、そのことを窓のすき間から、そっと見ていた人は何十人もいたのですが、誰一人警察を呼ぶ人さえいなかったのです。都会の冷たさを代表的に示す例としてよくあげられます。

日本はまだそこまではいっていないかも知れませんが、大同小異です。お互いが、傲慢になり、反省することが少なくなっています。しかし、内心は満たされず、人から愛情をもらいたがっているのです。人から善い人だ、偉い人だと思われたがっています。心の貧しい、心の弱い、傲慢な人ほどがそうなっているのです。

自分の罪過を指摘してくれる人がいたなら、謙虚に耳を傾け、自己を反省したいものです。外道の逆恨みはしたくないものです。減らず口は叩きたくないものです。

（七七）（人を）訓戒せよ、教えさとせ。宜しくないことから（人を）遠ざけよ。そうすれば、その人は善人から愛せられ、悪人からは疎（うと）まれる。

なかなか、難しいことです。私のように、教育者として、宗教家として、人に訓戒し、教えさとし、法を施す立場にあっても、私がその人の間違いを指摘しますと、多くの人は、あの人は子どもを教えているから、偉そうに言う、といって外道の逆恨みをします。そんなことをすればその人の値打ちは、ますます下がって行っていることに気付けません。

人は執らわれがありますと、人の言うことが正しく、客観的に判断できなくなってしまいます。それが、自分の心の垢の反映であることにさえ気付けないのです。

そうなりますと、自分が悪いことは棚に上げて、他人が悪い、相手が悪いと思ってしまいます。たとえば、自分が相手に本当の愛、エゴを捨てた愛をあげてもいないのに、相手が愛をくれないといって、相手を恨むのです。

読者の方はどうかそうならないで頂きたいと思います。

先ほどの偈の解説でも述べましたが、いま多くの人は自分の損得だけでものを言います。

たとえば、電車や汽車の中で高校生と思える生徒がたばこを吸ったり、ビールを飲んだりしていても、注意する人は殆どいません。恨まれたり、からまれたりしたら損だ、自分には関係ない、と見ないふりをしています。こうしたお陰で、いま高校生の喫煙、飲酒は日常化してしまっています。アルコール依存症になっている若者が激増しているといいます。二十年ほど前にアメリカで聞いていたことが、日本でも起こって来ています。

民主主義教育や民主主義道徳は、どうも人に迷惑をかけなければ、悪いことをしていてもかまわない、といった風潮を作り出して行くようです。同性愛や性の享楽化、アルコールや麻薬への嗜癖など、社会崩壊への過程に思えます。

読者とのエコーミュニケーション

短歌

○枝先に　残る花梨の　もみじ葉を
　今日の北風が　吹きさらいたり

○夕もやの　棚引く道を　点灯して
　影絵の様に　車過ぎゆく

（千葉県・山崎啓子）

○嫁ぎゆく　粧ひ終へし　娘の涙
　ひそかに　含みて　ガーゼの白し

○初産に　もどりくる娘の　布団干す
　乾いて　あたたかき　秋風の中

○若き身に　母となる日の　近づきて
　細き指に　娘はむつき縫う

（千葉県・中西美江）

俳句

○老若が　竹馬さながら　鮎を狩る

○滝白く　高僧　人の幸を説く

○滝壺に　渡す　そうめん流し哉

○谷底の　涼気吹き抜く　あばら庵

○涼風や　文鎮すべて　所得し

（阿南市・片田月牙）

お便り

○いつも『こころのとも』をお送り頂き、誠にありがとうございます。読むことで、自分のことを振り返り考える機会になり、自分の醜さに気づくと同時に、前進していくように勇気づけられます。厳しい留学生活の中で、本当に支えになっています。（東京・お茶の水女子大学への台湾からの留学生・糠明珊）

後記

一、ご覧のように、下記奥付の内容を変えました。エコーミュニケーション研究所という名称は、「読者とのエコーミュニケーション」と同じように、どうしたら人と人が心を響かせ合い、心を通わせ合って、幸せに存在して行けるかを研究したいと念じ、付けた名前です。

二、歩いてお四国巡りをしていて、ここに泊まったアメリカの青年から、日本語で書かれた自筆の、絵入りの年賀状が、アメリカから届きました。上手な漢字仮名まじり文と絵に驚きました。アメリカ人にもこんな人がいて嬉しくなります。三、書き出しシリーズで老子の道について解説しましたが、いかがでしたでしょうか。少し難しかったかな、とも思いますが。ご感想などお寄せ下さい。

四、「読者とのエコーミュニケーション」欄に、短歌、俳句、お便りを、はじめて載せさせて頂きました。ご投稿いただき、ありがとうございました。

五、正月をはさんで五泊六日で、以前住んでいた山城町から二人の中学三年生が受験合宿に来てくれました。中学生って、本当にういういしいと、久しぶりに生活を共にして感じました。ああいう新鮮さを誰でもが、いつまでも失いたくないものだと思います。

六、正月は冥土の旅の一里塚（一休作？）何があっても年々是好年日々是好日。

お便り、質問、要望、詩、短歌、俳句、川柳など、どうぞお寄せ下さい。

月刊　こころのとも
第五巻　二月号
（通巻　五十号）

平成六年二月八日
（発行人）中塚　善成（ぜんじょう）
（制作）ユニオンプレス
（発行所）
ひびきのさと
エコーミュニケーション研究所
〒771－43
徳島県勝浦郡勝浦町星谷
星の岩屋

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　振替口座　徳島1－38660